

海軍闘球の誕生

0960678D

都間昂人

キーワード：海軍闘球，予科練，戦時下スポーツ

1. 研究の動機、目的、意義

第二次世界大戦渦中の日本では、昭和18年、文部省により戦時下学徒体育訓練実施要綱が通達され、学生の体育運動や体育大会は強力な国家的統制を受けることとなる。しかし、一方では、重点種目として奨励されたスポーツもあった。その重点種目の最上位に選ばれた種目が、ラグビーである。明治以降、軍隊ではラグビーが実践され推奨されていたが、昭和17年、土浦海軍航空隊は、海軍飛行予科練習生（以下予科練）の訓練のために、独自の球技である海軍闘球を創案した。

本研究では、この海軍闘球に注目し、その誕生に関する経緯を明らかにすることを目的とする。本研究は、戦争の時代にスポーツに求められた価値とは何であったのかを浮かび上がらせ、さらには、今日のスポーツがいかなる観点から価値づけられる傾向にあるのかを認識するための、有用な視点を示すだろう。

2. 先行研究の検討

海軍闘球を直接の研究対象とした歴史研究は行われていないが、アメリカンフットボール協会史、ラグビー協会史、予科練関連文献には、海軍闘球に関する言及が見られる。しかし、その誕生については、筆者の意見は挙げられているが、1次史料に基づく創案者の意図は明らかになっていない。また競技規則も、先行研究により異なる見解が示されており、海軍闘球の実態や誕生の経緯は未だ明らかになっていない。

3. 研究の課題と方法

本研究では、下記2点の解明を研究課題として設定する。1) 海軍闘球誕生の背景(第1章)。

2) 海軍闘球の誕生(第2章)。第1章では、海軍闘球が主に実施されていた予科練に着目し、その教育理念・方法や、当時の体育・スポーツから、海軍闘球を誕生せしめた歴史的背景を検討する。第2章では、この球技の誕生を、1章で明らかにした歴史的背景や、海軍闘球創案者の供述といった観点から跡付けし、競技規則や方法、実施状況についても検討する。

また本研究では、主要史料として以下を用いた。1) 『闘球部会資料』(秩父宮ラグビー競技場所蔵)。6種の文書から構成されており、その1つである「闘球(仮称)規則 土空体育科」には、海軍闘球の規則・詳細が記載されている。2) 新聞、雑誌掲載記事。総合スポーツ雑誌『アサヒスポーツ』、『朝日新聞』、『毎日新聞』には、海軍闘球に関する重要な情報を含む記事が掲載されていた。

4. 本論

4.1 海軍闘球誕生の背景

少年期の若者を優秀な航空兵とする帝国海軍の航空搭乗員養成制度である予科練の教育の目的は、徹底した攻撃精神、犠牲的精神を養うことであった。それらを最も効率的に鍛錬できるとして、体育・スポーツが盛んであり、体操や棒倒し、球技、柔道などが主に実施されていた。

4.2 海軍闘球の誕生

(1) 海軍闘球誕生の理由

海軍闘球は、土浦海軍航空隊教官の堺大尉によって創案された。ラグビー、アメリカンフットボール、サッカー、バスケットボールの長所を取り入れて、予科練魂である攻撃精神、犠牲的精神、組織的な連携、冷静な判断力を盛った

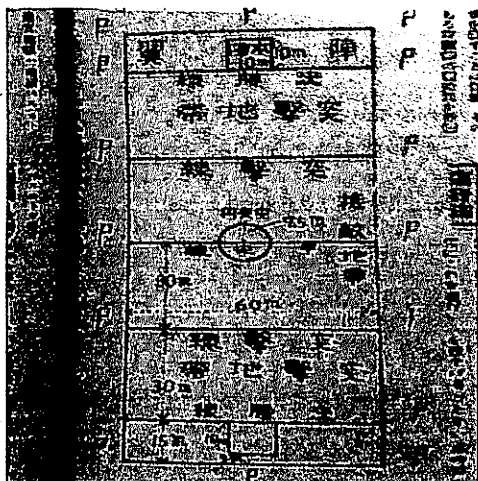
団体競技である。

海軍闘球創案以前、予科練ではラグビーとサッカーが盛んであった。しかし、昭和12年に甲種の制度が発足し、修業年限が短縮されたため、ルールが難しいこれらの競技をマスターさせるのは短期間では困難だとされ、海軍闘球という独自の球技が創案された。その誕生の理由は、1次史料である『アサヒスポーツ』の中での堺大尉へのインタビューや、1942年11月21日発行の『朝日新聞』などから以下の6点だと考えられる。

- ・ルールが簡単
- ・予科練魂を十分に錬成できる
- ・設備面が手軽
- ・実戦を強く意識した競技
- ・様々な身体運動を効率的に修得できる
- ・競技内容が海軍航空隊の精神と一致

(2) 海軍闘球の規則・競技方法

・競技場



- ・競技時間…20分が基本、適宜増減可
- ・競技員…15人が基本、適宜増減可
- ・服装…体操服上下、紅白鉢巻、運動靴
- ・審判…主審1人、副審2人
- ・ボール…サッカー用かハンドボール用
- ・得点…接敵地帯と突撃地帯を越え、相手の本陣に球をつければ、命中球で3点。陣翼なら有効球で1点を獲得できる。
- ・競技方法…接敵地帯では、球を持って走る、蹴る、前後左右に投げることができる。しかし、

突撃地帯では、前方に投げたり蹴ることはできない。妨害に関しては、接敵地帯では球を持っている者に対して妨害できるが、突撃地帯では球を持っていようといまいと妨害できる。

(3) 海軍闘球の実施状況

海軍闘球は、予科練習生に対してのみ実施されていたのではなく、海軍機関学校や海軍兵学校と海軍内部で広がりを見せた。さらに学生アメリカンフットボールの代替種目として、健民修練として、また中等学校における闘球としてほぼ同様の球技が実施されていたことも確認できた。海軍闘球は、新たに創案された戦時下スポーツの下地となる役割も果たしていたのである。

5. 結論

本研究を通して、海軍闘球誕生の理由や、競技規則・競技方法などの実態、実施状況が明らかになった。戦時下に生まれた海軍闘球というスポーツは、現在のスポーツのように娯楽的な要素ではなく、実戦のための訓練として、価値が置かれていた。しかし、それだけではなく、学生アメリカンフットボールにおける戦後への橋渡しとなった他、新たに創案された戦時下スポーツの下地となる役割も果たしたとされ、その功績は大きかったに違いない。

6. 今後の課題

本研究の対象は土浦海軍航空隊で実施されていた海軍闘球であったため、他の海軍航空隊や海軍内部で行われていた海軍闘球の詳細については不明なままである。実施場所により、競技規則が異なっていた可能性も有り得るため、さらなる検討が必要である。

また本研究では、海軍闘球の終焉については扱えなかった。GHQにより戦後への相続はなかったと考えられるが、詳細は不明である。上記2点を今後の課題としたい。

(指導教官 秋元忍)